

信 每 俳 壇 選

坊城 俊樹

隠蓑羽織り冬野に一人旅 （松本市）伊藤 和夫	風笛返り少年の意に背く （長野市）松本 宏美	去年今年虚子の闘志のやうなもの （千曲市）たじまたける
追儺寺ち高倉健をぶと見たり （長野市）白鳥 寛山	尺雪の肩に重たし一茶墓 （中野市）中野可菜乃	春唇の舌もて癒す指のとげ （長野市）荻原 宏祐
（飯田市）袁 梨	（飯田市）袁 梨	川中の石に帽子や春の雪 （佐久市）小川 夏央
赤木の残る木棚冬日影 （松本市）吉岡 徹	鱗削ぐ出刃の刃光る春浅し （佐久市）木戸口信幸	（長野市）赤羽 正久
（下諏訪町）中村 久 マーラーの妙なる調べ冬うらら （富田村）金本 牧子	四方山の冬芽の色の揺らぎ出す （大桑村）木戸口信幸	（長野市）荻原 宏祐
左手にダイヤの光り春近し （下諏訪町）中村 久	（佐久市）吉岡 徹	（長野市）竹内 創造
（富田村）金本 牧子	（佐久市）木戸口信幸	（上田市）竹内 創造

選評

一句目、隠蓑羽織るとは何やらミステリーを感じる。二人旅となると逃避行なのではあるまい。冬野という季題がまさに効果的。二句目、この句は破調である。だからこそ風が少年の思い通り

にならざ暴れている様子がリアルだ。三句目、この句を読むと虚子の「春風や闘志いだきて丘に立つ」を連想させる。しかし「去年今年」という季題は的確だ。まさに人生の節目の時であるからこそ。

今井 聖選

ウォーキング夫が先行く頬被 （大町市）原田 勝	搔くべきか搔かざるべきか雪の嵩 （佐久市）西田 和彦	背を搔するジャズピアニスト春兆す （坂城町）柄沢 満則
餅花を飾つて由を創る母 （松川村）岡 豊村	浅蜊汁飯屋の壁に裸婦の額 （箕輪町）向山 政俊	餅花を飾つて由を創る母 （松川村）岡 豊村
早春やこどもサイズの妻の靴 （辰野町）赤羽 正久	浅蜊汁飯屋の壁に裸婦の額 （箕輪町）向山 政俊	浅蜊汁飯屋の壁に裸婦の額 （箕輪町）向山 政俊
春寒や賽錢箱に錠二つ （辰野町）赤羽 正久	（辰野町）赤羽 正久	（辰野町）赤羽 正久
MRI簡に流れる春の曲 （長野市）荻原 宏祐	（長野市）荻原 宏祐	（長野市）荻原 宏祐
薦の眼にたちうぐわれや雪深し （須坂市）東鳶 雄一	泥足の仔猫の春を連れ帰る （下諏訪町）木口 碧	泥足の仔猫の春を連れ帰る （下諏訪町）木口 碧
肩甲骨反らし春空へ吠える （神奈川県横浜市）伊予 素数	深海にマリンスノーや春近し （下條村）福島田鶴子	深海にマリンスノーや春近し （下條村）福島田鶴子
朝礼に並ぶ沈黙雪の朝 （塩尻市）神戸 千寛	沢庵を摘み納屋より春戻る （飯山市）小野沢竹次	沢庵を摘み納屋より春戻る （飯山市）小野沢竹次
犬ぶぐり遅く光集まつて （長野市）武田 茜子	病む猫に寄り添ふ猫や春の星 （佐久市）竹内 勝代	病む猫に寄り添ふ猫や春の星 （佐久市）竹内 勝代
（辰野町）矢島あさ子	（安曇野市）小坂るり子	（安曇野市）小坂るり子

選評

一句目、昔はなかった「ウォーキング」という言葉に今はほとんど使われない「頬被」という季語が合わせられている。機知の句と言えよう。二句目、横雪のスピードと嵩のすさまじさに雪搔きを

思案している様子がよく出ている。三句目、背中の動きから季節を思う視点が斬新。四句目、生け花が空間の演出であることを思うとこの母はそういう感覚で餅花を飾っているのかもしれない。

神野 紗希選

まあ一度住んでみなされ雪五尺 （長野市）大島 昇	締め殺しの木や臘夜のタ・プローム （小諸市）加藤 陽介	セーターはチャンキニット髪を切る （下諏訪町）立石 理
スリッパの先に虚ある春愁 （松本市）伊藤 和夫	垂水打つ少年の影衝哭す （中野市）風間 陽介	スリッパの先に虚ある春愁 （松本市）伊藤 和夫
セーターはチャンキニット髪を切る （下諏訪町）立石 理	泥足の仔猫の春を連れ帰る （下諏訪町）木口 碧	セーターはチャンキニット髪を切る （下諏訪町）立石 理
性はいくつもあるよ冬晴れの富士 （下諏訪町）立石 理	深海にマリンスノーや春近し （下條村）福島田鶴子	泥足の仔猫の春を連れ帰る （下諏訪町）木口 碧
スリッパの先に虚ある春愁 （松本市）伊藤 和夫	沢庵を摘み納屋より春戻る （飯山市）小野沢竹次	深海にマリンスノーや春近し （下條村）福島田鶴子
セーターはチャンキニット髪を切る （下諏訪町）立石 理	病む猫に寄り添ふ猫や春の星 （佐久市）竹内 勝代	沢庵を摘み納屋より春戻る （飯山市）小野沢竹次
性はいくつもあるよ冬晴れの富士 （下諏訪町）立石 理	（佐久市）竹内 勝代	病む猫に寄り添ふ猫や春の星 （佐久市）竹内 勝代
スリッパの先に虚ある春愁 （松本市）伊藤 和夫	（佐久市）竹内 勝代	（佐久市）竹内 勝代
（辰野町）矢島あさ子	（安曇野市）小坂るり子	（安曇野市）小坂るり子

選評

一句目、一茶の〈是があま終の栖か雪五尺〉を踏まえ、雪国に暮らす厳しさをにじませた。穂やかな語り口に忍従と矜持が凝る。二句目、古都アンコールの遺跡タ・プロームは、寺院に絡みつく巨大

樹で知られる。締め続ける木と、膨張する臘と…エネルギーが激しく引き合う。三句目、トランプ大統領のトランシスター排除に、俳句で一石を投じた。冬晴れの富士は清らかに多様性を認め輝く。